看護職部門

二度目の戴帽式

【福井県・徳田（とくだ）のぞみ】

看護職部門
内館牧子賞

母が40歳の時、私は生まれた。母との別れが他人（ひと）よりは早いだろうと、看護師を目指すころにはうすうすと思っていた。私が30歳になる前にその時が来る…。しかし看護師になっても、そのような覚悟はできていなかった。

母は食欲がないと近所の医院を受診したが、すぐに総合病院を紹介された。腫瘍マーカーは医師が驚くほど高値で、即日入院となった。医師は私に「このままでは余命は数日から数週間です」と告げた。私が今まで看てきた末期がん患者と、目の前にいる母はあまりにも違っていた。医師の余命宣告と、母の見た目とのギャップに戸惑った。母が胃がんの末期だとは信じられなかったし、信じたくなかった。

「骨転移が全身に及んでいる」と医師が説明しようが、生きているのが不思議なくらいの血液データを見せられようが、私は上の空だった。私の目に映る母の姿を信じたい。それだけだった。母の前では看護師ではなく、ただの子どもでいたかった。

私が看護師に戻ったのは、母に告知しないと決めた日だった。母らしい最期を看取ろうと心に誓った。入院前「今度してあげる」と約束した白髪染めをした。仕上がりを鏡で見た母の、自慢のえくぼが輝いた。絶食中の母の口に、医師の許可を得て、巨峰を一粒入れると「おいしいわ」と喜んでくれた。おむつを交換すると「こんな日が来るなんてなぁ」と照れくさそうだった。どの母も愛しくて、できることは何でもしてあげたいと思った。

私が困っている時、差し出してくれた母の手はいつも温かかった。私が母に差し出した手は、温かかっただろうか。最期に母は患者になって、私が看護師を生涯続けていくためのヒントをくれたように思う。「困っている人に、お母さんのように温かい手を差し出せる看護師になる」。ひつぎの中の、黒く染まった髪の母に誓った。私にとって二度目の、忘れられない戴帽式だった。